



夕暮れ症候群が現れたら

[あとで読む](#)

【尊厳ある介護(14)】「家には誰がまっていますか」などと傾聴を

公開日：2017/10/05 (ソサエティ)

里村 佳子 (社会福祉法人呉ハレルヤ会呉ベタニアホーム統括施設長)

夕暮れ時になるといつも「家に帰らなくては」と小松孝子さん(仮名85)は、そわそわし始めます。

スタッフが「ここにいていいんですよ」とか「もう少ししたら、晩ごはんですよ」とお伝えしても「子供のごはんを作らないといけない。遅くまでここにいたら主人に怒られる」と聞いてもらえません。

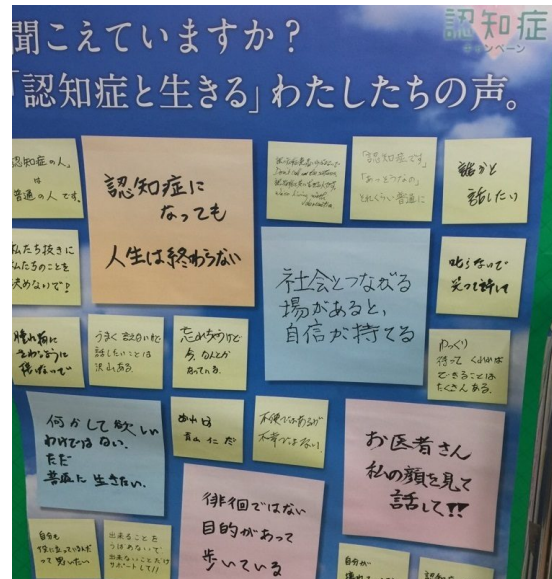
時には、形相が変わり一点を見つめて「家に帰らせて」と声を荒げることもありました。

小松さんは、認知症になる前は家族と住まれていて、昼間は一人で家での留守番をされていました。それができなくなって施設に入所となりました。

施設では、日中は、洗濯物たたみや、食器拭き、歌も上手でレクリエーションにも積極的に参加されていました。そして、他の入居者のお世話をしてくださるリーダー的な存在でした。

ところが、夕方になると急に変わるのです。

ご家族と一緒に自宅に連れて帰られ、外泊されたことがありましたが、その時も



NHK認知症キャンペーン・ポスター (里村さん提供)

夕方になると落ち着きがなくなるとのことでした。

認知症の周辺症状に「夕暮れ症候群」というのがあります。夕方になると不安がつのり、帰宅願望が強まるのです。

どうして夕方になると、家に帰りたくなるのでしょうか。特に女性の場合、夕暮れ症候群の人が多いように思います。夕方は家にいて、家族のために食事作りをするという長年の習慣によるのでしょうか。

日が暮れて外が暗くなる外部の環境が加わると、時と場所が分からない見当識障害のある認知症の人は、不安が増長するのでしょうか。

それとも夕方は、スタッフが夕食の用意で忙しくしているので、それが伝わり落ち着かなくなるのでしょうか。

私も夕暮れ時は、なんとなくさみしくなります。

子供の時に、母親から「夕ご飯までには、家に帰っておいで」と言われていた記憶と、動物が自分の巣や生まれた場所に戻ろうとする「帰巢本能」が重なって、夕暮れ症候群に陥るのかとも考えてしまいます。

他の施設でのことですが、小松さんのような夕暮れ症候群の認知症の女性がいて、家に帰りたいといわれるので、スタッフが一緒に以前住んでいた家にお連れした所どころ、「ここは家ではない」と言われたそうです。

そこで、スタッフは子供の時に住んでいた家に帰りたいのだと考え、その家を探しお連れした所すると、「ここも私の家ではない」と言われたそうです。

もしかすると、夕暮れ症候群の認知症の人にとって「家」とは、安心して過ごせる自分の空間や人生の中で一番輝いていた場所なのかもしれません。

そうだとしたら、夕暮れ時こそ、さみしくならないように小松さんに寄り添い、「帰りたい」と言われたら、「お家には、誰が待っているのですか」などと傾聴して落ち着いていただくよう働きかけることが大切です。

また、帰りたいと言われる前を見計らって、一緒に好きな歌を歌ったり、思い出を語るにより精神的な安定をはかる回想法を行うのも効果的だと思われます。

その時間の確保のためには、夕方の業務の見直が必要だと考えます。

小松さんは、入居されていた数年間毎日とっていいほど、夕暮れ時は「帰りたい」と訴えられていました。

なぜか、急病で入院される前の数日間は、夕暮れ時でも「家に帰りたい」とは言われませんでした。

(注)事例は、個人が特定されないよう倫理的配慮をしています。

「尊厳ある介護」は毎週水曜日に掲載しています

続報リクエスト

マイリストに追加

以下の記事がお勧めです

- > [里村 佳子氏のバックナンバー](#)
- > [前原氏、小池都知事の出馬「高度な政治判断」と含み きょう会談](#)
- > [各国で中道左派凋落 日本立憲民主党は流れを変えられるか？](#)
- > [「小池都知事は政治家としてアウト」](#)
- > [前原代表 民進党ではせいぜい50議席](#)

プロフィール

最近の投稿



里村 佳子(社会福祉法人呉ハレルヤ会呉ベタニアホーム統括施設長)

法政大学大学院イノベーションマネジメント(MBA)卒業、広島国際大学臨床教授、前法政大学大学院客員教授、広島県認知症介護指導者、広島県精神医療審査会委員、呉市介護認定審査会委員。ケアハウス、デイサービス、サービス付高齢者住宅、小規模多機能ホーム、グループホーム、居宅介護事業所などの複数施設の担当理事。今年10月に東京都杉並区の荻窪で訪問看護ステーション「ユアネーム」を開設予定。

News Socraは、記者30年、新聞協会賞受賞の元日経新聞の土屋直也が編集長をしています。ネットで本当のジャーナリズムを盛り上げたいと思い、ベテランライターによる独自記事とセレクト記事を掲載しています。